

山野の空き地を利用したキイチゴの栽培

館 和 夫

はじめに

近年，自然食に対する関心が高まるにつれ，野趣に富んだ自然食品の供給源として，山野の果たす役割が見直されてきている。それらを活用する方法の一つとして，林地の周辺や道路の法面におけるキイチゴの栽培が考えられる。しかし，キイチゴの栽培は，道内では外国で改良された品種の一部を除けばまだ少なく，収量や栽培技術についてもよく知られていない。本稿では，これまで現場で栽培試験を行ってきた主なキイチゴの特性や増殖方法，結実成績，栽培上の留意点などについて述べる。

道内に自生するキイチゴ3種の特性

道内に自生するキイチゴ属には，クロイチゴ，エビガライチゴ，ナワシロイチゴ，クマイチゴ，エゾイチゴ，ベニバナイチゴ，モミジイチゴ，ヒメゴヨウイチゴなどがある。これらのうち前にあげた4種は，比較的豊産性で生食および加工にも適している。そのため今後，地域の特産品としてとりあげられる可能性がある。

当場の樹木園には現在，上記の8種のキイチゴが植栽されており，生育状況を観察している。このうちクロイチゴ，エビガライチゴ，ナワシロイチゴの3種（図 - 1）について，圃場と実験林の周辺で，1987年から試験栽培を行ってきた。それらの形態や開花・結実などの特性を次に示す。



図 - 1 キイチゴ属3種の結実した枝

クロイチゴ

山地性の落葉低木で，株の高さは 1.5 ~ 2m，茎は太くとげがあり，根元直径は 15 ~ 20mm になる。葉は広卵形，先端がとがった三出複葉で互生し，緑にやや不規則な二重鋸歯がある。

長い葉柄と葉脈上には小さなとげがあり，また葉の下面には白色の軟毛が密生している。6月に果枝の頂部に淡紅色の花が咲く。果実は3種のうちでは最も早く，7月下旬から8月にかけて黒紫色に熟する。

エビガライチゴ

山野に広く自生する落葉低木で，株の高さは1~2m，新条は初め直立するが，後には弧を描いて外方向に伸びる。茎は密生する赤褐色のせん毛ととげに覆われ，太いものでは根元直径が20mm以上になる。茎の先が地面に接したところから発根し，生育範囲を広げながら増殖する性質がある。葉は三出複葉で有柄，側小葉は卵形で互生する。葉の裏面は雪白色の密毛に覆われ，別名ウラジロイチゴともいう。6月から7月にかけて小形の白い花をつけ，果実は8月上~中旬に赤く熟する。

ナワシロイチゴ

山地，丘陵地，原野などに広く分布する。株の高さは低く，1m未満の場合が多い。葉は3~5枚の小葉からなる羽状複葉で互生，とげが疎生した平滑なつる性の茎の先から根を出しながら地を這って伸びる。花は紫紅色で6月から7月にかけて咲き，果実はエビガライチゴよりやや遅く，8月中~下旬に紅色ないし暗紅色に熟する。

これらのキイチゴは，2年目の茎条から出た新梢の先端の花序に帽子状の集合果（小核果）をつけるが，結実した枝はその年のうちに枯れる。

増殖と育苗の方法

キイチゴ類の増殖は，まき付け，株分け，さし木のいずれによっても容易にできる。苗の大きさや性質にある程度ばらつきがあっても一時に多量に必要な場合はまき付けを，数量は少なくても親株の性質を受け継いだ優良苗がほしい場合は，株分けかさし木を行うのがよい。種別の増殖方法は，あらかし次のとおりである。

クロイチゴ

まき付け：8月上~中旬に果実を収穫し，搾汁したのち水洗いして種子を取り出し，少し湿らせた状態で冷蔵庫などに保存しておく。10月上旬に，苗床1㎡当たり3g（2,700~2,800粒）前後をまき付ける。翌春の発芽期待本数を200~300本/㎡とし，発芽本数が多い場合は間引きを行う。なお，秋までに30cm前後に成長したものを約150本程度得苗し，次年度に定植する。

株分け：5月から6月上旬にかけて，株の回りに新しく出てくる萌芽枝を，土中に根を付けた状態のまま掘り取って苗木として用いる。

さし木：緑枝さしの適期である7月上~中旬頃に密閉さし（さし床の湿度を保ち，地温を上げる目的で，さし木床をビニールなどで覆う方法）を行えば，好成績が期待できる。

エビガライチゴ

まき付け：8月中~下旬に果実を採取し，クロイチゴ同様に精選貯蔵しておいた種子を，10月上旬に1㎡当たり3g（2,000~2,400粒）前後をまき付ける。翌春の発芽期待本数は200

本 / m²で、得苗本数は 100 本 / m²前後とする。なお、秋期の平均苗長は約 40cm であり、これを越年後の春に定植する。

株分け：6月上旬に、株の回りに数多く出てくる新しい萌芽枝を掘り取るか、あるいは前年に茎条先端の接地部分から発根したものを切り離して苗木にする。

さし木：7月中旬に当年枝を採取し、密閉さしを行えば 90%前後の活着が得られる。

ナワシロイチゴ

まき付け：8月中～下旬に種子をとり、貯蔵しておく。1 m²当たり 4 g (1,500~1,600 粒)前後をまき付ける。得苗本数は 100 本 / m²前後とし、間引きは必要に応じてエビガライチゴと同様に行う。

株分け：前年に茎条の接地部分から発根したものを分離・育成する。

さし木：エビガライチゴと同様の要領でさし付けることにより、高い活着率を期待できる。

植栽環境別の成績

植栽環境により生育状況がどのように異なるか、また結実にはどの程度の照度が必要かを明らかにするため、1987年5月に前記3種の1年生苗を用い、場内の3カ所(28年生トドマツ林内、22年生カラマツ林縁、圃場)に植栽した。1990年9月に調査した各種の株の大きさ(高さ)は、表-1に示すとおりである。株の高さは各植栽区ともクロイチゴが最も高く、次いでエビガライチゴ、ナワシロイチゴの順であった。また、株の幅(長径)はナワシロイチゴが大きく、顕著な伏生形の樹形を示していた。1株当たりの新条の発生数は、各種とも圃場が最も多く、次いで林縁、

林内の順で、比較的日当たりのよい場所の樹勢が優れていた。

植栽場所別に1株当たりの収量をみると、圃場での収量が最も多く、林縁がそれに次ぎ、

林内での収量が最も少なかった。種別にみた収量はエビガライチゴが最も多く、クロイチゴがそれに次ぎ、ナワシロイチゴは最も少なかった。

なお、上記のうち林内の植栽区は、林縁から林内に向けて連続的に植栽されたものである。図-2は個体別の収量とそれぞれの植栽場所別の相対照度を示したもので、図から、これらのキイチゴの収量は林縁から林内に入るにつれて大幅に減ること、また相対照度が30%未満になると結実がほ

表 - 1 植栽後4年目のキイチゴの成長

植栽場所	種別	調査株数 (株)	株の大きさ		根元幹本数		新条根元直径 (mm)	1株当たりの収量 (g)
			株高 (cm)	株幅 (cm)	新条 (本)	旧枝 (本)		
林内	クロイチゴ	12	119	157	2.0	2.3	13	185
	エビガライチゴ	11	78	123	1.8	1.5	11	173
	ナワシロイチゴ	9	27	151	1.3	1.3	5	0
林縁	クロイチゴ	9	160	165	4.7	3.9	18	244
	エビガライチゴ	9	135	218	3.3	3.3	13	279
	ナワシロイチゴ	8	49	233	3.8	2.1	8	36
圃場	クロイチゴ	5	149	326	5.4	4.8	20	664
	エビガライチゴ	5	144	314	14.8	9.0	16	1,436
	ナワシロイチゴ	5	43	381	9.2	4.6	10	399

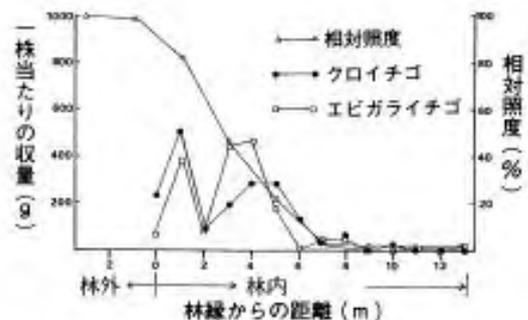


図 - 2 林内の相対照度と収量
(1990.7.20 美唄)

とんど期待できないことがわかる。

次に果実の大きさと糖度を植栽場所別にみると(表-2), 果実の粒ぞろいが圃場で収穫されたものが最も安定しているほかは, 大きな違いはなかった。なお, 種別にみた果実の大きさは, ナワシロイチゴが最も大きく, クロイチゴが最も小さい。また, 糖度はクロイチゴが最も高く, 他の2種は同程度であった。

表-2 果実の大きさと糖度

植栽場所	樹種	果実の大きさ		平均果重	糖度
		果高	果幅		
		(mm)	(mm)	(g)	(%)
林内	クロイチゴ	8.1	10.0	0.43±0.06	14.0
	エビガライチゴ	12.5	14.1	1.18±0.19	9.5
林縁	クロイチゴ	8.8	10.4	0.50±0.06	13.6
	エビガライチゴ	13.3	14.3	1.29±0.12	9.6
圃場	クロイチゴ	8.4	11.0	0.51±0.04	10.3
	エビガライチゴ	12.1	15.3	1.25±0.06	8.3
	ナワシロイチゴ	15.7	19.0	2.60±0.95	9.3

注) 大きさと重さの標体は各100個。

糖度は各20個を搾汁した平均。

栽培上の留意点

以上の試験結果と栽培上の経験から管理上とくに留意すべき点を, 種別に述べる。

クロイチゴ

日当たりのよい場所を選んで栽培地とする。実生苗では3年目位から結実する。樹形が株立形で太い茎条が叢生し, 藪状になりやすいので定期的にせん定する必要がある。せん定は秋期落葉後に行い, その年に発生した茎条を間引くほか, 長さ1.2m前後に先をつめたり, 枯れた枝を除去したりする。当年の茎条の発生が少ない場合は, 細い茎条でも翌年には結実する枝になるので, なるべく残しておくのがよい。また, 施肥は秋期落葉後せん定済みのものに行う。

エビガライチゴ

植栽適地はクロイチゴと同じである。5月から6月にかけて新しい茎条が叢生するとともに, 株の周りの土中からも盛んに萌芽が出る。圃場などの場合は通路に出る萌芽を整理し, また茎条の伸長する方向を後で作業しやすいよう一方に誘導するとよい。施肥, せん定を必要とする場合はクロイチゴに準じて行う。

ナワシロイチゴ

日陰では極端に成績不良で, 結実年齢も遅くなる。また草生地では下刈の際に誤って刈り取られてしまうことも多い。地床植物が少なく日当たりのよい道路の法面や崖下などの裸地に植えるか, または草丈程度に低く設置した横木にからませて繁茂させるなどの方法が考えられる。

おわりに

美唄市光珠内の林地周辺で行ったキイチゴ栽培試験の一端を紹介し, これまでの結果から現段階で妥当と思われる栽培管理法について記した。林内など自然条件下での栽培は収量や採果効率の点で問題が多く, 畑地等栽培条件に恵まれた場所に比べて結果初期の段階では必ずしも有利とはいえない。しかし, 山野の利用価値を高め, 多様な自然環境をつくる上では有効な手段と考えられるので, 今後も各種のキイチゴについて栽培技術を検討して行きたい。

(樹木科)